

## コンピュータとわたし

教養部 吉野 安之

1976年、筑波大学に大型計算機が導入され、稼働を開始して間もない時期に、TOSBAC 5600 と称するコンピュータの一般端末室（オープンバッチ処理装置）を介して対面することになった。コンピュータに関する一般的知識やFORTRANのプログラミングなど予備知識もないままに、いきなり多変量解析（因子分析）を利用して科研費による調査結果の一部を処理し、体育学会で発表する破目になったためである。

わたしが使用し始めて3ヶ月後に発行された計算センターニュース、Vol.1によると”ソフトウェアシステムが従来のものから改造されて新しい版であること、実際の利用者プログラムによる十分な検査を経ていないことなどから、予測できなかった欠陥やある種の使用条件による誤動作も起りうるものと考えられる”と記され、当時は試運転稼働の状態であったようである。幸いにして利用負担金はとられず、利用者も非常に少なかったので、入門者として、これ程めぐまれた機会はなかった。（ニュース、Vol.1は創刊号であったが、有料化を知らせるものでもあった）

コンピュータを利用するの体育学研究では先駆者であったM教授の指導を受けながら研究を進めることになった。全くのゼロからのスタートでは遅滞として進まず、何とか見通しがつくまでの数え切れない出来事は、後の話題となった。

空き時間はほとんど計算センター勤務で、当時利用していた方々の名前や顔が今でも浮んでくる位、入り浸りになっていた。センター内で起る種々の問題について、どうしていいかわからない時、マニュアルを調べても理解できない時、調べるのも面倒な時など、何となくわかりそうな人を見つけては問題の解決に協力してもらった。長くその場にいると環境が人をつくるのか、ある時、逆に質問される立場になったこともあり、何となくわかりそうな人のグループになったのだと思い、不快の連続を味わっていたものとして、いつときの清涼剤であった。

ところで、学会大会号の原稿メ切りが近づいてきたにもかかわらず、流したプログラムのエラーは一向に解決できず、ついに処理結果を見ることができなかった。取りあえず研究目的、方法などをまとめた原稿を送って、その場を凌いだ。その後、執拗な計算センター通いが功を奏して、デバッグを終えたプログラムが流れ、最終処理結果を得たのは発表日間近かであった。カードを流した後、ディスプレイのメッセージに注目、しばらくは処理中と思われる状態が続く、最後にENDとSUCCESSFUL、直にアウトプット要求、ラインプリンター内で数字が踊るように打ち出されるのを夢中でのぞき込んでいた……あの時の快感は今でも忘れない。一応、学会発表は無事に終えた。

必死に取り組んだコンピュータとの6ヶ月間に及ぶ奮闘で、しばらくは蛻抜けのからだだった。"今までコンピュータを全く使ったことのない人でも、わずか4時間の講習会に出席するだけで、

ほとんどのデータ解析を自由自在に行なえる素晴らしいプログラム”、“ 計算機についての予備知識を全く前提としない”、“ データをかかえて困っている人は是非この機会に” などと過大なほどの宣伝とともに、SPSSの講習会が開かれた。今ひとつFORTRANに馴染めず、あれほどまでしてコンピューターを利用することはないと思い始めていた矢先でもあって、その効果は宣伝以上であった。なるほど短時間のうちに、体力測定データやアンケート調査の整理・分析に利用できるまでになり、その使い易さに驚嘆した。コンピューターとの強い絆が結ばれるキッカケとなった。わたしの回りでは、このSPSS（現在はSAS）が大いに活躍することになる。

計算センターから情報処理センターへとサービスの多機能化が進む中、センターとのかかわりも人それぞれに異った利用形態となっている。どんな利用価値のある機能でも、それを十分に使いこなせるようになるには、それなりの時間をかけて学習しなければならない。今まで、かなりの時間をかけていくつかの機能を利用できるようにはなってきたが、その時間が無駄と思えば、これ程までのコンピューター付き合いはなかったであろう。少なくともコンピューターを単なる道具として使い、教育・研究の場で利用したい内容が無駄なく、速く、容易にアウトプットできるようにしたいと願っている。